

## 政治家の勇ましい言葉

### 「対話ではなく圧力」考



「対話による問題解決の試みは一再ならず、無に帰した。なんの成算があつて我々は三度、同じ過ちを繰り返そうというのか。必要なのは対話ではなく圧力だ」と日本時間9月21日、安倍晋三首相は、国連総会の一般討論演説で述べた。

「対話でなく圧力」というのはどういう意味であろうか。圧力は、対話の席に着かせるための手段ではなかったか。だとすると、対話のためにも一層強い圧力が必要だ、と語りかけるのが筋だろう。

に想定しているのだろうか。

ミサイルが頭上を通過し、激しい言葉が米朝間に飛び交っている現実には直面して、戦争を回避するために政府に適切な対応を求めるのは国民として当然のスタンスだろう。しかし、政治家の勇ましい言葉によって戦端が開かれる危険が大きくなることは誰も望んでいない。

太平洋戦争に至る道にはいくつも分岐点があつた。米国を中心とする経済封鎖が、日本を戦争に追い込んだことも一つだが、その米国が最も重視していたのは、日本の中国大陸での軍事行動を抑制することであつた。1931年の満州事変から37年の日中戦争へと拡大する戦線の中で、38年1月に近衛文麿首相は和平案提示に蒋介石が率いる国

民政府が応じないことを理由に、交渉打ち切りを声明した。いわく、「国民政府を相手とせず」。両国間の外交関係が断絶し、交渉の回路が閉ざされた。近衛首相は日本の軍事力に期待したのだろう。このことが中国問題解決を困難にし、泥沼の戦争状態は太平洋を挟む破滅的なものとなった。

### 時代錯誤のスローガン

対話を拒否することがもたらす最悪の結末を、日本人は自らの歴史のなかに知っている。そうした経験を生かすのであれば、

あくまでも話し合いに解決を求める道筋に沿って説明する必要がある。力を前面に押し出す安倍首相は、70年前の近衛声明の過ちを繰り返すというのか。

もつとも、安倍首相には話し合いという姿勢がないというべきかも知れない。内政面では、数々の疑惑に対して、言葉の上では「丁寧な説明」と言いながら、議会の多数を頼んで力で押し切るうとしていいる。

そのために「国難突破」という時代錯誤のスローガンで総選挙に臨み、説明の機会を放棄した。選挙公約として「教育の無償化」など甘言を重ねているが、それは結果的に野党との争点を失わせた。

野党からの批判は疑惑隠しに集中するだろう。そうした中で、圧倒的多数という議席の力を維持する皮算用が、どんな結果を生むのか。国民の選択が問われる。11月16日記す

(東京大名誉教授 武田 晴人)



国連総会の一般討論演説を行う安倍首相  
=日本時間9月21日、ニューヨーク